

今、市長と市役所幹部を交えた会議の中で、「市役所の仕事を市民に取り組んでいただく1課1事業」について話し合いをしています。

どのような仕事を市民の方にやってもらえればいいのか。誰にお願いすればいいのか。市民個人なのか、自治会なのか、その受け皿をどうすればいいのか、対価の支払いはどうするのか、市民に行政の仕事を押しつけることにならないか、職員は悩み考えています。

なぜ、「1課1事業」が市長の言う「一人ひとりに役割」「居場所づくり」につながるのかを伺いました。

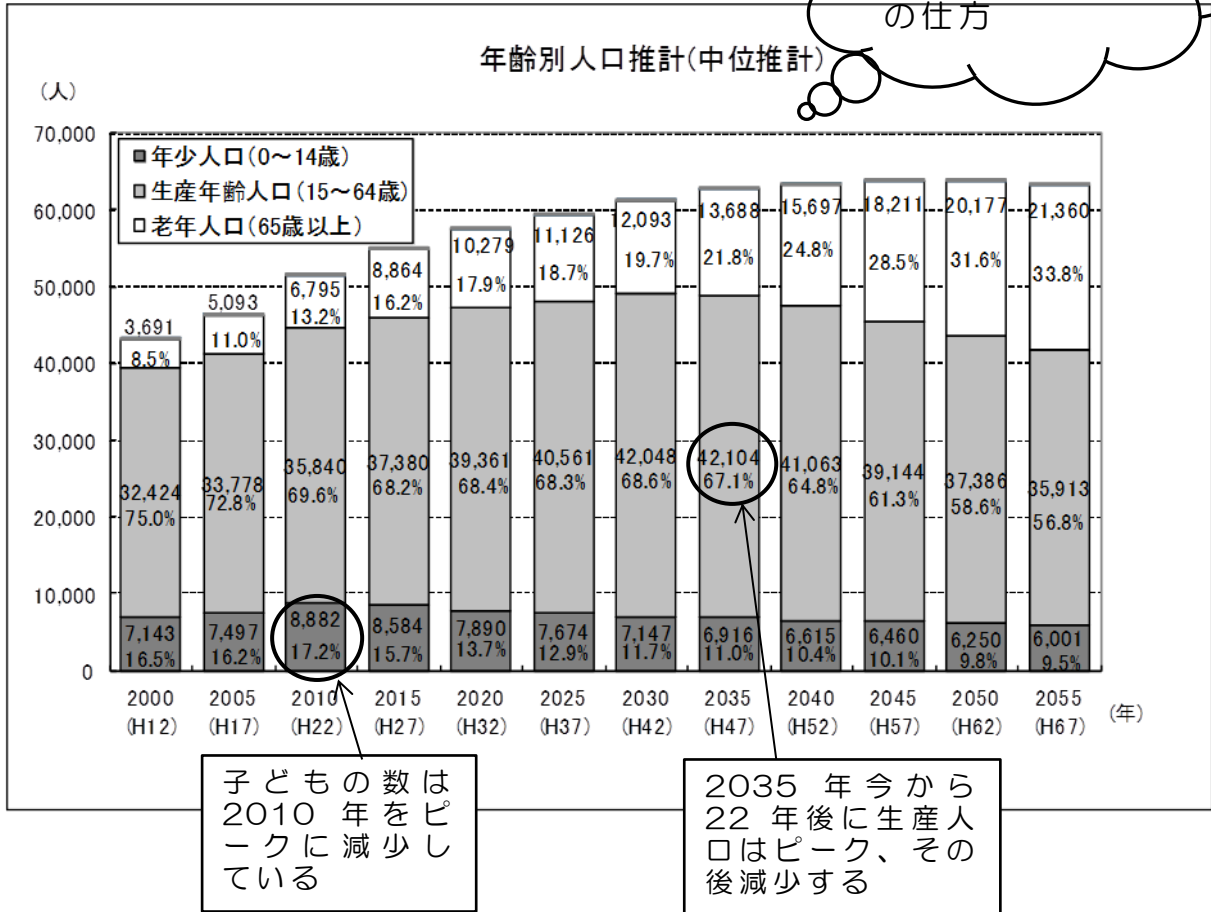
長久手市には、素晴らしい人がたくさん住んでみえます。そして市内の喫茶店には、定年退職され、時間に比較的余裕をお持ちの方がたくさんおられます。元気ハツラツな方がいっぱいです。こうした元気な方々には、ぜひ、まちづくりに関わっていただきたいのです。これまで培ってこられた豊富な知識や技術、経験をご自身が暮らすまち（地域）のために生かしていただきたいのです。

長久手市の人口は、これからもしばらくは緩やかに増加すると予測していますが、2050年頃をピークに減少していきます。一方、高齢化は確実に高まっていきます。現在、65歳以上の方は約7,000人ですが、2050年には約20,000人まで増えます。認知症の方も現在の約800人が、約3,000人にまで増えると予測しています。

日本全体は、すでに人口減少社会、超高齢社会に入っていて、孤独死や認知症の対策が急務となっています。長久手市も、将来、こうした課題に対応できるよう、市にも市民にも比較的余裕がある今のうちから準備しておく必要があると考えています。

資料：「平成 24 年度長久手市将来人口推計」

人口は増える
と言っても、これ
までの日本は違
う増加の仕方



市長が言う「亭主在宅症候群」とは何か

最近、このような話をよく聞きます。

- 会社を退職した夫が家にいると、妻は毎日3度の食事を作らないといけないから大変だ。
- 夫が勤めていたときは、昼間は夫のことを気にせず生活していたのに、退職した途端に1日中一緒にいることが多くなって、妻の生活リズムが狂ってしまった。
- 妻が出掛けて帰って来ると、すぐに、夫が「今日の夕飯は何？」と聞いてくる。

妻としては、毎日がこんな調子だと疲れてしまって、病気になりそうだということです。これを「亭主在宅症候群」とか「主人在宅ストレス症候群」と呼ぶそうです。

妻が「亭主在宅症候群」にならないためにも、夫のみなさんには、家庭外で「役割」と「居場所」を見つけ、活躍してもらうべきだと思います。そうすれば、夫婦そろって元気で健康に人生を送ることができると思います。

市民力、職員力につながる取組みとは

役所の中堅クラスの職員の時間単価は、2,500円くらいです。ところが、市役所の仕事は、内容によっては時間単価に見合っていないものもあります。例えば、空き地の雑草苦情の現地確認や、講演会等の資料の袋詰め作業などです。市職員は「忙しい、忙しい」と言って、時間単価2,500円の職員がペアで車に乗って現地確認に行ったり、時間外に袋詰め作業を行ったり、これらの対応に日々追われている部署も多くあります。

この一部を市民のみなさんに手伝ってもらえたら、職員はまちに出て、課題を見つけ、解決策を考える時間に充てることができます。そこで、1課につき1つの事務や事業を市民の方にお渡しできないかと考えているのです。もちろん対価を支払うことも考えています。対価の支払方法については、個人なのか自治会なのか、ポイント制度なのか等、十分な議論が必要です。

職員には、市民のみなさんに仕事をお渡しし、それで空いた時間を使って地域に出て課題を見つけ、その課題を解決するために、先進地へ視察に行ったり、研修に行ったりして勉強するように言っています。勉強してきたら、課題を解決するためどうしたらいいか、市でできることは

何か、私に提案するように話しています。将来の人口減少、超高齢社会に備え、余裕がある今から、市民のみなさんでできることは、市民のみなさんにやっていただきたいのです。

そのために市役所は、市民のみなさんに力を発揮してもらう機会を作っていないといけません。「1課1事業」を通して、市民のみなさんの「役割」と「居場所」をつくり、50年前の長久手のような、人と地域の絆が感じられるまちになれば、もっと素晴らしい長久手になります。

この取り組みは2050年に向けての第一歩です。これまでの価値観を変えてほしいのです。将来、人口の4割が高齢者となり、行政や社会保障だけでは何ともならない時代が、もうすぐそこまで来ています。長久手では、その対応に向けて、まだまだ一歩が出ません。職員はどうやったらできるか悩んでいます。考えています。悩み、考え、提案力をもっと身につけてもらいたいと思っています。

市民のみなさんが持つ、豊富な知恵と経験をぜひ、まちづくりに使ってください。一緒に汗を流し、市民も当事者としてまちづくりに主体的に関わっていただくことが大事ではないかと思います。